救急車は呼ばないで

山田まさ子

昭和三十年、万年筆屋の勤務を終えた母は、播磨屋橋で、待ち合わせた父を待ち続けた。父は現れず、母は最終バスのテールランプを見送った後歩いて何キロもの道を歩き、暗い長浜トンネル、そこは母の故郷である被差別部落と、普通のひとの暮らす町との境目であった。母は父との恋に賭けていた。村を抜け出せる、義母の虐待を逃れられる命綱が失われた、実際は父は麻雀に耽っていて忘れたのだが、初心な母はひとは約束を守るものと信じていた。どこまでも続くかのような暗いトンネルを抜けるうち、母はノイローゼになった。

それから母は精神病院に二年投げ込まれた。電気ショック療法のため記憶を失った。最初はイロハの文字も書けなくなっていた。幼い頃の記憶は再び戻ることがなかった。わたしの祖父はやせ衰えた娘の姿に、退院させてくれと頼んだが、医師は許可しなかった。事務員が患者の食費を使い込み、患者は栄養失調になったという新聞記事が出た。病院から、祖父は衰弱した母を背負って連れ出した。

医師が、廊下まで追いかけてきた。

「退院許可なぞいらん。娘は殺される」

「血統じゃ。もういっぺん分裂病になったら、今度は二度と助からん」

祖父の背に浴びせられた台詞だつた。

やまだ　まさこ

土佐育ち。法政大学文学部卒。松戸市元民生委員。第十二回ＪＴＢ旅行記賞二位。高知県芸術祭文芸賞。第十六回法政大学懸賞論文一位。第十回大原富枝文学賞。

平成十二年秋、母は体調を崩した。大きな病院はこわがるので、クリニックに連れて行った。風邪と診断された。処方された薬を飲んで一週間経っても、〝風邪〟はちっともよくならなかった。なんにも食べられなくなり、お腹が痛い、痛いという。

「風邪でこんなに痛いもんかねえ、まさ子」

「病院に行こうよ、おかあさん」

「病院に行ったら、帰れなくなる……救急車は呼ばないで。病院は……行きたくない。……病院はこわい」

母が自宅にいた最後の夜、あの夜の、一晩のことは、くっきりと憶えている。母親はうめき続け、トイレに行こうとしたまま起き上がれなかった。わたしはずっと傍にいた。からだをさすっても、風邪薬を飲ませてもずっと痛いという。

朝になり、母親の顔は青ざめて、唇は色を失くしていた。それでも、きっぱりという。

「救急車は呼ばんといて。……病院はいや」

その声がかぼそくなり、うわ言のようになっていく。お母さんがいやがっているのに、無理に病院に連れていくことなんかできない。わたしはどうしていいかわからなくなり、朝八時になってようやく、友人に電話した。

「おかあさんが、白くなっている」「バカ、早く救急車を呼べ」「いやがっている」「無視しろ、呼ばないかん」

わたしは母親に謝りながら、救急車を呼んだ。

隊員が部屋に上がり、眼を閉じて声も出せなくなっている蒼白い母の首に手を置

墓参りをしている母と、小学校六年生の筆者（高知市内）

いて脈を取った。このとき、ちょうど母はがっくりと首をたれて気を失った。
「意識がない。病院に搬送します」
日曜日なので詳しい検査はできなかった。若い医師は腹にガスがたまっているのだろうと笑顔を向けた。応急措置のまま母は放置された。「おしっこを一晩していない」と、わたしは看護婦に訴えたが、大部屋の看護婦はわがままを言っているといわんばかりに睨んだ。
「この部屋は、そんな患者が来るところじゃありません。自分でトイレに行ってもらいます」
だが母はもう歩けず、尿自体が出ないのだ。月曜日の検査まで待った。
翌日の検査で、別のベテラン外科医師から十二指腸が溶けていて腸と癒着している、すぐに手術を行なうと知らされた。
四時間、わたしはただ祈った。手術後の母はジャバラホースに繋がれていて、声をしぼってホースが蛇みたいでこわいといっていた。喉が渇いても水が飲めないので、わたしはガーゼを湿らせて口にくわえさせた。治ると信じていた、あの日々はまだ幸せだった。少なくとも口はきけたのだから。
だが、この声の出せる時期も短かった。呼吸困難をおこして、喉にチューブを繋ぐことになった。母に、チューブを鏡で見るかと尋ねると、こわいからいいという。
初めて母のおむつに緑色の水みたいな便が出たときは嬉しかった。薬品の匂いしかしないのだが、病院の洗濯室で洗いながら、便があることが誇らかだった。
わたしは毎夜、静まりかえった病室で薄暗い中で点滅する光を眺め、機械の無機質な音を聞いていた。ベッドの隣にマットを並べて眠った。母親が苦しくなったらひいて呼べるように、母親の手首とわたしの手首を紐で結(ゆ)わえておいた。

翌年二月、母は亡くなった。脳梗塞が起きていた。血液を溶かす薬を使うと、手術した腸が塞がらなくなる。何もできない。あと二日だといわれた。
母は苦しみ始めた。金魚が空気中にはねるように身を震わせながら、わたしに眼で問いかけた。なにが起こったのかと。わたしは嘘を並べ始めた。
「ほら、最初の手術のときも、苦しかったやん。今度も治るき」
最初、信じたようだった。唇の動きで、癌じゃないか、と聞いている。むろん、癌ではなくて、脳に血栓ができているのだが、母親は癌以外は助かると思っている

のだ。「癌やない、治るき」
ここまで話してから、わたしの眼から涙がとめようもなく溢れた。四カ月に及ぶ闘病生活は治るためのものだった。今さら、もう治らないなどとどうしていえよう。母は、呼吸器をあてたまま、悟ったようにわたしを見詰めた。隠し切れない不安を読んでいた。これまでの感謝の気持ちも、さよならも、こめられる限りのすべての思いをこめて、わたしたちは眼をのぞき、視線を重ねた。
意識を失った母の最期は、心臓マッサージのための電気だった。電気をあてて飛び上がる母親の体をみながら、わたしは瞬間、思った。もうやめて。楽に死なせてやって。
あれほどおびえていた電気を命の最後にかけるくらいなら救急車を呼ばなければよかった。それから後悔ばかりが続いていた。付き添っていた友人の話によると、わたしは死亡宣告を聞き、「そう」と言ったきり、反応のない様子だったという。泣きはしなかった。母親の死がよく飲み込めないのだ。
執刀した医師は、わたしを呼び出し、責めた。
「なぜ、もっと早く連れてこなかった。あと一週間、いや四日早ければ助かったいのちなのに」
「一週間前にクリニックに連れていって……」
「どこのクリニックが診断したかは知らない。どこの医者でも症状を言わなければわからないんですよ。あなたのおかあさんは異常に我慢強かった。その性格を知っているのは娘のあなたしかいない」
娘が伝えなくって誰が伝えるんだという医師の言葉を、わたしは毎日、毎日、反芻した。医師のいうことは正しかった。たったひとりのおかあさんを守りきれなかったのだ。
葬儀屋が飛んできて、葬儀の日程が決まっていく。棺桶は大きすぎてアパートに入らず、わたしは葬儀会館の部屋で棺桶の隣で眠った。おかあさん、傍に行くから待っていて。
土佐の言い伝えには、棺桶に写真を入れると、死者が呼びに来て早く死ねるというのがある。いえば止められるから、私はこっそりと母親の帯にわたしの写真をねじ込んだ。
火葬が終わって白いかぼそい骨を、わたしは齧(かじ)った。骨になっても、おかあさん

がさみしくないようにと思ったからだ。

平成十七年五月、離婚していた癌になった父親を看取った後、うつ状態になったわたしを、精神科に知人が連れていった。

「電気治療をしましょう」

主治医は「よく効きますよ」と勧めた。

「おかあさんが病院をいやがったので、あなたも子供の頃から未治療で放置されたんですね」

電気はこわい、わたしはそういい募った。母親を殺したと泣き出すと、「不可逆的」「ディフェクトのPT」〔統合失調症末期妄想〕と診断書に記された。

生前、母に電気ショック療法のことを聞いたことがある。眼を見開いて胸に手をあて「痛かった」とだけいった。それ以上は聞けなかった。だが見開かれた眼に浮かんだ怯えがすべてを語っていた。

母の時代には電気を流す邪魔にならないように髪を剃られた。奥歯にガーゼでくるんだゴム管を噛ませ、頭部に電導子を押し当て痙攣を誘導した。当時の医師の指導書には気を失ったら水をかけろとある。失禁する者、激しい痙攣での骨折脱臼、心臓停止時の注射。エーテルの臭いで察知し、暴れる者はベルトで縛った。

ずっといわない言葉があった。たしかにわたしは母親を殺した。その判断力の乏しさで。けれども耳に残る切れかかった糸のような母の声。救急車を呼ばないで、病院はこらえて。

「授賞の言葉」より（文芸思潮52号より転載）

受賞の手紙を頂いた夜、母が夢に登場しました。お盆の日だから出てきたのでしょう。一番、喜んでくれるひとです。

選考して下さった先生、編集の皆様、ありがとうございました。

精神病院通院中にお世話になった皆様にも感謝申し上げます。松山市の精神科医、笠

陽一郎医師はホームページ「毒舌セカンドオピニオン」でご自身の体調を犠牲にしながら減薬に取り組んで下さいました。光愛精神病院の島田医師は電撃治療に強く反対しています。「地上の旅人」さんは家族を精神医療のせいで亡くされながら、多くの患者を助けています。

そして仲間たち、大量処方され薬剤の副作用に苦しんで亡くなったみんな、この賞はみんなのものです。

どこかの町にいるあなた、理由もわからず、震えていませんか？　かつてのわたしのように。もしもあなたがそこにいるなら、その暗闇にいるなら、まずピルカッターを手に取ってください。山のように処方された錠剤のうち、ひとつぶを四分の一に切って下さい。そこから始まります。少しずつ、わずかずつ、自分の脳をダマすようにしながら減薬してください。

精神科医には、丸投げしないで。

医療の現実を知らなかった、母子でおろかな道を歩んだ者からの手記です。

今でもなんにも知らずに無邪気に医師の処方薬を飲むあなたがいる、どこかにいることを考えると、たまらない気持ちがします。宗教も健康食品もいりません。あなたがあなたを助けるしかない。お読み下さって、ありがとうございます。